



## 町PTA連合会研修会★住友達也講演会 移動スーパーとくし丸が目指す社会

10月7日(金) 19時～

会場●3階多目的ホール 入場無料

講師●住友達也 (株式会社とくし丸代表取締役)  
主催●北島町PTA連合会

## 中国・四国の作曲家2016 in 徳島 — 創造と交流の祭典 —

10月29日(土) 13時～17時

会場●3階多目的ホール

入場料●一般2500円、学生1500円(前売当日共)\*未就学児入場不可  
内容●①室内楽現代作品プログラム、②ぼくたちの詩から生まれた  
音楽—子どもたちと作曲家のコラボレーション—

作曲家●青木省三(岡山)、熊澤住子(岡山)、齊藤武(岡山)、田中照通(山口)、伴谷晃二(広島)、新倉健(鳥取)、松岡貴史(徳島)、松岡みち子(徳島)、山下耕司(岡山)、米倉由起(岡山)、遠藤雅夫(東京)、木下大輔(横浜)、小林隆一(東京)、近藤裕子(宮城)、中村典子(京都)、二宮毅(北海道/福岡)、神本真理(東京)、森田泰之進(東京)、山本準(東京)

主催●中国・四国の作曲家(松岡☎088・644・3071)

■当会は日本作曲家協会に所属する中国・四国在住者有志が2008年に結成したグループです。第9回の今年は徳島県で開催。徳島での開催は2012年の阿南市に続き2回目です。多数ご参集ください。

## フレッシュ・アップ体操●NPO法人ステップ21 第7回徳島のつどい

10月30日(日) 13時半～

会場●3階多目的ホール 入場無料

主催●ステップ21in徳島(西田☎088・633・0191)

## 子育て支援ファミリー・コンサート

11月4日(金) 11時～11時半(開場10時半)

会場●3階多目的ホール 無料

出演●四国大学吹奏楽部

主催●北島町教育委員会(☎088・698・9812)

■毎年11月に開催し好評をいただいている未就学児歓迎のコンサート。時間は約30分。子どもさんが喜ぶような曲を用意しています■子育て支援の催しです。乳幼児とお母さんお父さん大歓迎!

## 北島トラディショナル・ナイトVOL.20

### ケルトの歌、やすらぎの調べ マスカース・コンサート

11月22日(火) 19時～

会場●3階多目的ホール

入場料●前売/大学・一般2000円、小・中・高1500円(当日各500円増)

出演●マスカース【高野陽子(歌、バウロン)+kumi(アイリッシュ・ハーブ)+吉田文夫(ボタン・アコーディオン、コンサーティーナ)+笠村温子(アイリッシュ・フィドル)+原口トヨアキ(ノーサンブリアン・スモールパイプほか)】

主催●北島トラディショナル・ナイト実行委員会(☎088・698・1100)

共催●北島町立図書館・創世ホール、徳島県民文化祭開催委員会

後援●アイルランド大使館、徳島新聞社、朝日新聞徳島総局、四国放送ほか

■1997年にスタートし、ついに20回を迎える《北島トラディショナル・ナイト》。今年は、関西屈指の美声歌姫・高野陽子率いる《マスカース》が満を持して登場。■アイルランドには「フォギー・デュー(the foggy dew=霧のしずく)」という美しい楽曲があります■この歌は、アイルランド独立の契機のひとつとなった《イースター蜂起》の死者を悼む鎮魂の作品です■その音楽は、ただ切なく美しいだけではなく、重たく深いものを誇り高く背負っているから、力が宿っているのだと思います■北島町では、ささやかな連帯の気持ちを込めて毎年この曲を、出演者に演奏していただけてきました■二〇一六年は、その《イースター蜂起》からちょうど百年目にあたります■徳島県北島町のステージで、美声ヴォーカリスト・高野陽子が、切々と「フォギー・デュー」を歌いあげます■その歌声は、きっと海の彼方のアイルランドの人たちの魂に届くであろうことを、私たちは信じてやみません■乞う、ご高評。多数ご参集ください。



「水と風と生きもの」と上映会

■9月24、25日のドキュメンタリー映画「水と風と生きもの」(藤原道夫監督作品、119分、日本、2015年)上映会は、4回上映で合計120名を超す入場者がありました。他の大都市圏(人口百万都市)のミニシアターでの上映会で、1週間で90名などという数字があった中で、これは大健闘、大成功だったといってよいと思います。

■前号にも書きましたが、小松島市出身の同映画のプロデューサー・牧弘子さん(メディア・ワン)の功績が非常に大きかったと思います。FMびざん(9月15日)や四国放送ラジオ(9月18日)での番組出演のために、牧さんは早めに徳島入りし、12日間徳島で滞在されました。その間になじみの喫茶店をつくり、ネットワークのようなものを形成、そのルートで上映会に来て下さった方が何人かいました。その中には、2012年のモナコ国際映画祭でインディペンデントスピリット賞を受賞された映画監督・日下早苗さん(徳島市出身、現在ニューヨーク在住)もいました。日下さんは、たまたま米国からお里帰りされていて、ご母堂と共に来られたのでした。

■牧プロデューサーの不思議なご人徳の故としか言いようがないのですが、彼女は、家族・親戚・友人等に前売券を20枚以上販売し、その上に新たな人脈を通じた掘り起こしをされたので、今回の総入場者数の約4分の1は牧さんの尊いご尽力によるものといえるのではないかと思います。これは凄いことです(高知から1名、牧さんのシドニー時代のご友人が駆けつけて下さったのはビックリしました)。

■当館はこれまで、有料の映画上映会は3階ホールでしか行なってきたことがなかったので、1日2回・2日間の有料上映会を2階のハイビジョン・シアターでするのは、ある種の冒険企画でもありました。もともとその部屋は、110インチのアナログ・ハイビジョン映像を見せる施設であって、90年代、ハイビジョンの試験放送時代はよく宝塚歌劇の番組や映画放送などをご覧いただいていた。その後は、世の流れがデジタル方式に移行し、モロモロあって、今では遠藤ミチロウさんのライブや上方落語と講談の会、子ども向けビデオ上映会、おはなし会などに活用している状況です。

■実は今回110インチの画面に16×9の比率の映像をフルサイズで上映できるようにするまでに、非常に苦労しました。諸事情があって、投影できる画面のアスペクト比が4×3のみになっていた(両サイドにマスクがかかった状態)のですが、それを16×9にしなくてはなりません。設置メーカーの高松支社に相談したり、電気関係に詳しい元館長の小山建夫さんや、ギター協会の川竹道夫さんとも協議し、牧さんのお知り合いの電気店の方にも何度も足を運んでいただき、数日間実験をしました。当館の開館が1994年6月で、当時のハイビジョンと今のハイビジョンでは有効走査線数が異なっていること、ブルーレイの再生装置(プレイヤー)の販売時期の関係で接続端子の形状が違うこと、などの問題があり、延べ8時間ぐらい投影実験に費やしました。最終的に、何とかうまくいったときには本当に胸をなでおろしました。私はこの方面に全くうといので、メーカー関係者、小山さん、川竹さん、K田電気店の方に深く感謝する次第です。

■「水と風と生きもの」上映会準備に当たり、中村桂子さんやその周辺の書物や新聞記事などに、自然と気を配るようになりました。我が家は「日本農業新聞」を定期購読しているのですが、中村先生は時々紙面に登場さ

れます。また、10月2日付け「読売新聞」には中村先生のインタビュー記事が大きく掲載されていました。

■このたびの上映会をきっかけとしてJT生命誌研究館とのご縁ができました。これは大きな財産だと感じています。その関連で同館の刊行物の楽しさや魅力といったことを考えるようになりました。私はもともと、書物の装訂(造本設計、図書設計)やブック・デザインに深い関心があり、創世ホールでは過去に杉浦康平先生講演会《ブック・デザインの宇宙〜本の森羅万象》という催しを企画し、大きな反響を呼んだことがあります。また私自身、徳島県立近代美術館の企画展の関連企画で《本をめぐる実験》という演題で講演したことがあります。

■そういう者からすると、生命誌研究館の刊行物は実に造本が魅力的で、あちこちに工夫が凝らされているのです。本が好きなら共通して言えることですが、特に愛着がわく書物を枕元に置いて寝たり、本をなでたりさすったりするという行為は、ごく日常的に普通にあると思います。生命誌研究館の書物も、楽しい遊び心が満載で、例えば2015年12月に刊行された年刊号『うつる』(新曜社)の特徴は、①帯に穴が開いている(その穴から狸が顔をのぞかせている)、②カバーから見返しにかけて鳥や小動物(ネズミやタヌキ)の足跡が型押しされている(レリーフ状に凸凹がある)、③別冊付録で小冊子が巻末のポケットにおさめられている(有袋類をイメージ?)などなどの仕掛けが、これでもかというぐらいあるわけです。本好きなら誰だって、胸がときめかずにいられないはずですよ。

■『うつる』(中村桂子編、新曜社、2015年12月15日)には、東京都医学総合研究所長・田中啓二さんの談話採録が掲載されています。この記事がめっぽう面白いのですが、田中さんは徳島市出身の方です。徳島県立城北高校から徳島大学医学部栄養学科ご卒業、ということで、非常に親近感を覚えました(今の北島町教育長は元城北高校校長)。徳島新聞地方部デスクをしている知人のS口記者にこの談話採録のことを知らせると、その田中さんはノーベル賞に近い所にいると言われていた人じゃないかなあ、という返事が返ってきました。その後、10月になって大隅良典さんがノーベル賞を受賞されたときは、親友として田中さんの談話記事がドカンと「徳島新聞」に掲載されていました。で、よくよくJT生命誌研究館の年刊本を見ると、すでに大隅先生は2010年刊行の『めぐる』(新曜社、2010年7月31日)に登場されているわけです。えー、何が言いたいかというと、生命誌研究館とその刊行物は色々な意味で深く知的で凄いで、ということです。

■会場での展示物や配布資料の件で大変お世話になったJT生命誌研究館の《表現を通して生きものを考えるセクター》の村田英克さんはとても面白い人でした。氏は、映画の企画者としてクレジットされているほか、作品の後半で映し出される「生命誌版 セロ弾きのゴーシュ」の上演では中村桂子さんと一緒に舞台上で朗読劇を実演し、歌まで歌っているのです。

■私は、この企画の進行過程で、村田さんと実際に会い、しょっちゅう電話や電子書簡でやり取りする内に、この人はとんでもない人だ(楽しい人だ、面白い人だという意味の誉め言葉)と思うようになりました。そもそも氏は、6月末に表敬訪問した時、私がたまたま着ていたアンディ・ウォーホルのバナナTシャツ(ヴェルヴェット・アンダーグラウンドのアルバム・ジャケットと同じもの)を見て「あっ、ウォーホルですね」と即座に指摘するような人です。当館の愛好者なら、友達になりたいと思うようなタイプの、楽しい(そしてとても優秀な)人材だと思います。

■実は、来年あたり、もう一度生命誌研究館関係の上映会をすることになるのではないかと思います。今度は無料の、子どもさんたちも喜んで鑑賞

できるような路線になる予定です。そのときは、またご支援お願いいたします。(文責=小西昌幸 2016年10月7日脱稿)

本の紹介 ● 紀田順一郎 『大伴昌司エッセンシャル』

■待望の本が出た。当館にとって大切な作家・文芸評論家・書物研究家の紀田順一郎さんが、高校時代からの盟友・大伴昌司の業績を、既存の書物などと全く違った切り口で鮮やかに切り取って見せた労作。全頁から熱い友情と、36歳で世を去った大伴への哀切の心情が通奏低音として響く■紀田先生の二度目の講演会を実現した際、「大伴のお母さんと長いこと会っていないんだ。大伴のことで確認しておきたいこともあってね」と紀田先生がおっしゃったので、私は上京する折に、四至本アイさん(大伴昌司ご母堂)と紀田先生と池田憲章氏と私の4人での会食の場をセットさせていただいたことがある(2005年12月18日、ホテルパシフィック東京〔品川〕内《大志満》)■そのアイさんも今はおられない(2013年ご逝去)。2005年に紀田先生とアイさんが三十数年ぶりに再会を果たした際、アイさんが「紀田さんは若い頃、本当にハンサムでいらしたのよ」と微笑み、紀田先生が照れていた光景を懐かしく思い出す■勝手なことを書かせていただくなら紀田先生には、この後ぜひご自身の『(未刊行)作品集』(例えば『ザ・ホラー』の完全復刻やお若い頃のコラム復刻など)を世に送り出していただけようをお願いしたい。(文責=小西昌幸 2016年10月10日脱稿) ◆紀田順一郎『大伴昌司エッセンシャル 大伴昌司(未刊行)作品集』講談社、2016年9月28日第1刷発行、A5判ソフトカバー・192頁。本体2000円+税。



大伴昌司 生誕80周年記念

盟友・紀田順一郎が満を持して、早すぎた天才型マルチ人間——大伴昌司を解く! 空想を愛し、怪獣世代のバイブルを作った大伴昌司まぼろしのルーツとなる、入魂の同人誌「SFの手帖」ほか 珠玉の単行本(未刊行)作品集を初編纂!!

Otomo Shoji Essential 講談社

261

大伴昌司(未刊行)作品集 大伴昌司エッセンシャル 紀田順一郎 1959年慶 1960年代 その後の エッセイを 半世紀以